救済の多様性　PL 教団 ①

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

カトリシズムの場合

高校教師のアルジマーは 15 年間修道院で生活したという元修道女である。修道院から大学に通って教師になった。高校では、歴史、道徳、地理、宗教を教える。彼女は友人の紹介で PL 教団を知った。その後ある事件に巻き込まれ、PL 教団の教えと実践によって九死に一生を得るという体験をした。しかし、PL 教団は宗教とは思えないという。

> 私は、PL の教えを信じますが、カトリック信者です。というのも、PL が宗教だとは思えないからです。PL はあくまでも「宗教的な施設 (Instituição Religiosa)」なんです。とても美しい教えを説く人生哲学です。PL が本当の宗教になるには歴史 (的な蓄積) が必要だと思います。カトリックには聖人がいて、聖人たちは奇跡を起こし、人をたすけるという歴史を刻んできました。PL で私は助けられましたが、私に起こったような奇跡がもっと起こらなくてはいけないのです。

彼女はピストルで腹部を撃たれるという事故に遭い、生死の淵を彷徨った。入院中に取り次いでもらった PL の救済の業である祖遂断（おやしきり）と、妹が毎日 PL 教会に通って便所掃除という献身（みささげ）を行ったことが救いにつながったと理解している。しかし、彼女は自分と同じような奇跡譚がもっと語られるようになるまで、PL 教団は人生哲学のレベルに留まると理解する。

ここで彼女が「PL は宗教と思えない」と語る理由について考えてみよう。そこで彼女にとって「宗教」とは何を意味するのかを理解してみたい。彼女の語りから、「宗教」は「組織（施設）」と「体験（奇跡）」の二つの側面で理解されていることが読み取れる。そのうえで、PL 教団は「組織（施設）」の面で「宗教的」だが「宗教」でなく、奇跡の「体験」という面でカトリック教会に劣るとする。

まず、「宗教的」という言葉に関してである。彼女は「宗教的な施設」という表現にこだわっているようだが、それは PL 教団の正式名称のポルトガル語訳が Instituição Religiosa Perfect Liberty（PL）となっていることによる。彼女は「宗教的な施設（Instituição Religiosa）」は「教会（Igreja）」ではなく、「教会」でないものは「宗教的」であっても「宗教」と呼ぶことはできないと理解する。さしずめ、「宗教的」とは「宗教」のようなもの、宗教の下位に位置付けられるものということになる。また、「体験」という面に関しては「人生哲学」は「体験」を導くものであっても「体験（救済）」それ自体ではない。PL 教団はカトリック教会のように救済に関して歴史的蓄積をもたないために「宗教」と呼ぶことはできない、ということになる。つまり、彼女にとって「宗教」とはカトリック教会を意味する。実は彼女に限らずブラジルで「宗教」といえばカトリック教会（少なくともキリスト教）のことだと理解されることは多い。とすれば、逆に PL 教団は自らを「宗教的な施設」と表現することで「宗教」という枠組みにあえて収まらず、それによって既成宗教としてのキリスト教との対立を避けてキリスト教文化圏への浸透を容易くしていると考えることもできる。

以上の議論は、宗教が異文化で受容されるプロセスにおいて当該宗教の思惑と異なる受容者の理解がそれを遅らせたり促したりすることがあることを示している。ここでの議論は教団の教えそのものではなく、教団名といった制度的側面に関するものだった。そこで、次に教えに関わる側面を考察してみたい。アルジマーの語りを続けよう。

> 私は先祖と話すことができるんです。亡くなった先祖と話しをしていると、妹に何をしているのと聞かれることがあります。こんなこともありました。家のガスレンジの火を消さず、ドアも閉めずに外出したことを思い出し、急いで家に帰ったんです。ところが、ドアは閉まって火が消えていました。先祖が私のかわりにやってくれたのです。PL に入会して先祖を重んじるということを教えてくれたから、そのような経験をするようになったのだと思います。

彼女は PL に入会してから先祖祭祀を行うようになった。それは、PL 教会の月例活動として日曜礼拝以外に行われる、平和の日（1 日）、先祖の日（11 日）、感謝の日（21 日）の式典の一環である（本誌 Vol.16 No.7）。先祖祭祀の PL 教団での意味付けについては後述するが、多くの日系新宗教では先祖の霊を弔い遺徳を偲び、現世に生きる人びとに救済（安寧）をもたらす実践だと理解されている。これは、カトリック文化圏の人々にとって新しい宗教儀礼である。しかし、カトリック文化圏でも先祖祭祀に類似した儀礼がある。毎年 11 月 2 日に行われる死者の日である。しかし、これは未だ天国に入ることができず煉獄で苦しんでいるであろう死者の霊を弔うものであって、結果として祈りを捧げる者がそれにより何らかの救済を得るというものではない。

一方、カルデシズムやアフロブラジリアン宗教では先祖や死者の霊が生きる者の現世救済に重要な役割を果たすと理解されている。それは、霊媒を通じてそれらの霊にメッセージを送ったり、霊媒がそれらの霊から救済をもたらすメッセージを受け取るというものである。それらはここで述べている先祖祭祀とは様子が異なる。しかし、アルジマーの場合は、PL の先祖祭祀をブラジル既存の心霊主義的な宗教文化の枠組みで受け止めたように見える。とすると、このような受容のされ方を教団側はどう理解するのだろう。ある日本人幹部は次のように語る。

> 先祖を拝むということは物事が客観視できるようになる、ということなんです。自分自身ががんじがらめになって、どこに問題の糸口があるのか分からないときに、神様や先祖を拝んで一歩二歩下がってみると見えてくるようになるんです。実際には、霊が何かをしてくれるということではなく、個人が、自らの努力によって客観視することで問題が解決されるようになります。しかし、会員たちは霊が何かをしてくれるのだ、というふうに考えます。実際にそれで救われているのだから、それでいいんです。またそれで客観視できるのだから、それでいいんです。

PL 教団の先祖祭祀はブラジルの宗教風土に移植され、会員たちはブラジル的な枠組みで受容する。本来の教えが変容を免れない場合があるとはいえ、それによって異文化に伝えられる。ここでの議論はいわゆる布教の方法論の問題である。今回の事例を見る限り、いわゆる正統的な教えを「正しく」伝えることよりも、先ずは「組織（施設）」と「体験（奇跡）」をいかに受容者が受け入れやすい形で伝えるかが問題になるように思われる。